

# 日本ヘーゲル 学会 主催

## 合 評 会

2012 年 12 月 23 日 (日)

東京工業大学キャンパス・イノベーションセンター 2 F

多目的室2

・・・・・・・・合評会 ① 13 時 30 分～15 時 30 分・・・・・・・・

小島優子：『ヘーゲル 精神の深さ：『精神現象学』における  
「外化」と「内化」』（知泉書館 2011 年）

司 会： 山口誠一（法政大学）

自著紹介： 小島優子（駒沢大学）

特定質問者：滝口清栄（法政大学）、寄川条路（明治学院大学）、飯泉佑介（東京大学）

～ ～ 休憩 15 時 30 分～15 時 40 分 ～ ～

・・・・・・・・合評会 ② 15 時 40 分～17 時 40 分・・・・・・・・

野尻英一：『意識と生命：ヘーゲル『精神現象学』における有機体と  
「地」のエレメントをめぐる考察』（社会評論社 2010 年）

司 会： 飛田 満（目白大学）

自著紹介： 野尻英一（早稲田大学）

特定質問者：片山義博（日本福祉大学）、川瀬和也（東京大学）、徳増多加志（鎌倉女子大学）

本書は、ヘーゲルの『精神現象学』を、自己意識と実体との「外化」（Entäußerung）と「内化（想起）」（Erinnerung）という運動として捉える。こうした研究を行う基本的な意義は、「自己意識」と「実体」との関係を「外化」という自己意識から実体への方向性から捉えるだけではなく、「内化」という実体から自己意識の働きかけという方向性からもまた捉えることによって、自然的意識と学、自己意識と現実との関係を明瞭にするためである。これまでのヘーゲル研究においては、「外化」と「内化」とがどのように関連づけられているかについての研究は不足している。本研究では、従来省みられることの少なかった「内化」を行動と言葉という観点から考察する。

ヘーゲル哲学を「外化」という観点からのみ考察する場合には、複数の人間同士の間での承認関係と、人間と神の間での承認関係とが交わらずに別々のものになってしまうという問題が生じる。それに対して、本書では、「外化」と「内化」という観点から『精神現象学』において、人間的世界における和解と宗教的世界における和解との宥和がいかにして可能であるかについて論証を試みたい。結論では、自己意識が現実の世界の歴史をも、また宗教の世界をも、同一の地平において経験することを解明する。すなわち、ヘーゲルは現実の世界の内に学的なもの、理性的なものを見出そうとしたのであり、絶対者、あるいは神を彼岸にではなく、此岸に見出そうとしたのである。

自己意識が自らの「内的なもの」を明らかにする「外化」が、同時にまた「内化」であることが自己意識それ自体のあり方として明らかになる。このことが意味するのは、自己意識はそのつどの過程において常に自らと、自らが関係づけられるものとの間で二つに分裂するのであり、このことは意識の有限性に基づく。しかし同時に自己意識は行動と言葉を介した運動を通して、自己自身の即自性を越えていくものであり、ここに自己意識の「自由」および「主体性」を見出すことができる。

『意識と生命——ヘーゲル『精神現象学』における有機体と「地」のエレメントをめぐる考察』  
野尻 英一（早稲田大学）

本書は、博士論文『有機体と「地」のエレメント——ヘーゲル『精神現象学』を解読する』（早稲田大学、二〇〇七年）を公刊したものである（市販にあわせてタイトルを変更している）。

本書で筆者は、ヘーゲル有機体論の特徴を西欧思想史における生命論の系譜の中に位置づけ、評価する作業を行い、同時にそれを現代社会論、現代人間論の基礎論へと接続する試みを行った。

西欧においては、ユダヤ・キリスト教、近代形而上学といった契機によって「生命」を超越的、形而上学的な理念としてとらえる傾向が生じ、特に啓蒙主義哲学の代表格と見なせるカントにおいてその傾向は顕著である。この流れに対する反動として、生命を非理性的なもの、非意識的なものとしてとらえる傾向がロマン主義において生じたが、ヘーゲルの生命論はこの流れに属するものとしてとらえることができる。しかしながら『精神現象学』においてヘーゲルはもろもろの理由から、自然を精神と同等に置くロマン主義からは距離をとり、精神を自然よりも優位に置く思想を採った。結果として、ヘーゲルの有機体論は、非意識的、非理性的でありながら同時に非自然的でもあるような原理を人間精神の根底に見いだすようになった。これがヘーゲル哲学のいわば精神主義的なロマン主義とも言える傾向を形成し、「法哲学」に鮮やかに見られるように、彼の哲学が社会哲学、社会倫理的な原理を構成する哲学となりえた契機である。ただし、ヘーゲル自身はその非自然的、非意識的、非理性的な原理そのものが何であるのかは直接には語らず、叙述の構造下に抑圧した。

本論文の結論部では、マルクスやコジェーヴ、フーコーといった、ヘーゲル以後の思想家の助けも借りて、この原理を人間的欲望の次元、同化の次元、「共感性」等のワードによって見いだすことを仮設的な結論として提示した。以上のように、本論文はヘーゲル哲学の特徴を生命論、有機体論の文脈に置くことで新たな光のもとに描き出したものである。

# 東京工業大学キャンパスイノベーションセンター

## 最寄駅

JR 山手線・京浜東北線 田町駅下車(東口) 徒歩 1 分

都営三田線・浅草線 三田駅下車 徒歩 5 分

